

京都商工会議所 会報誌 特別号

京

Vol.1

キョウビジネスレビュークロス

Business Review *Cross*

創刊のご挨拶

京都商工会議所 会頭

立石 義雄

講演録

Deportare Partners 代表・元陸上選手

為末 大

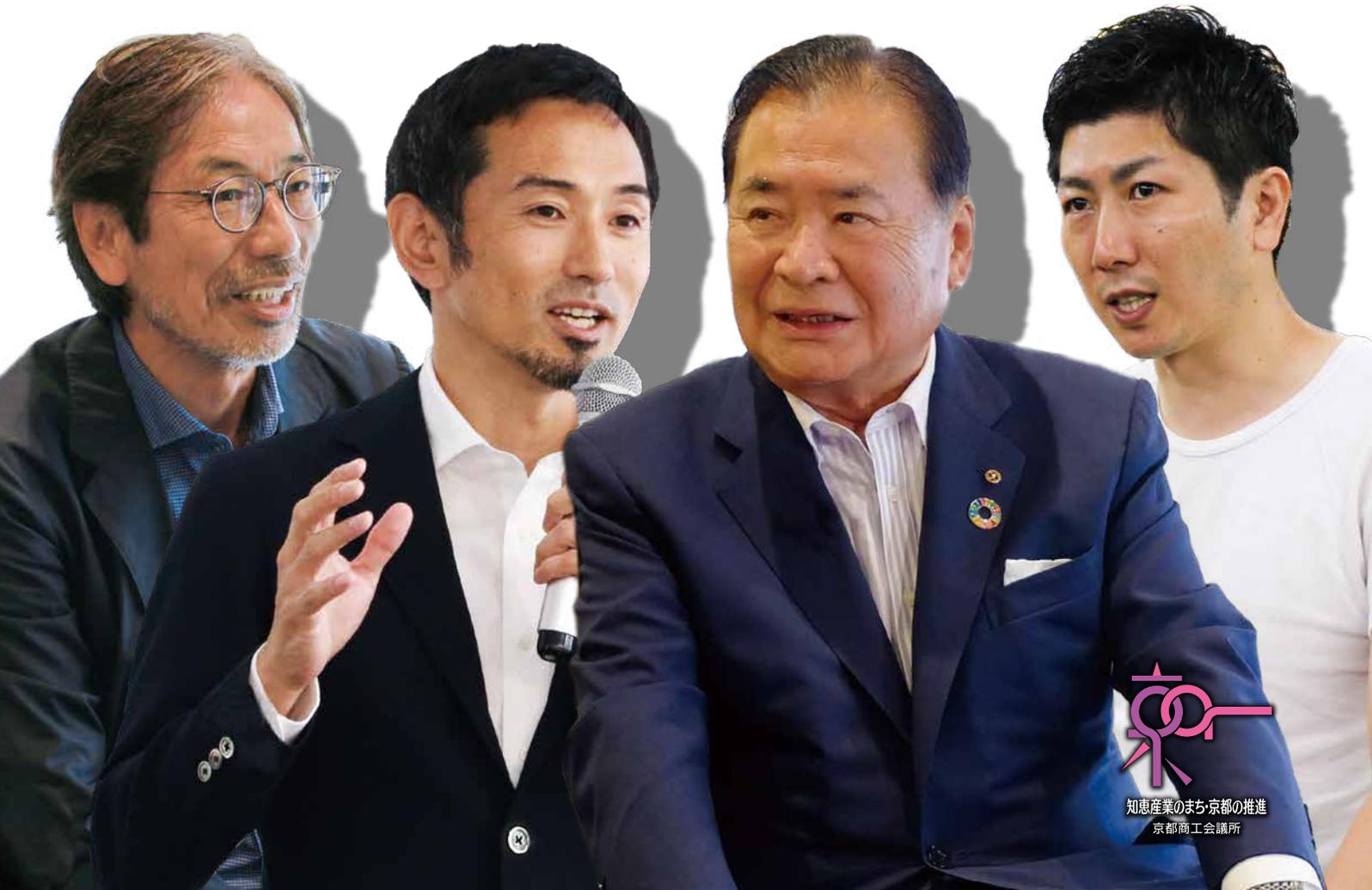
インタビュー

シーナリーインターナショナル 代表
元エルメス本社 副社長

齋藤 峰明

株式会社 Darma Tech Labs
共同創業者・代表取締役

牧野 成将



知恵産業のまち京都の推進
京都商工会議所

人を感じる。未来を思う。

人々のしあわせのために。よりよい社会の実現のために。

オムロンは、独自のテクノロジー「SENSING&CONTROL+THINK」で社会的課題の解決に挑戦する企業です。

人や物を感じて制御する「SENSING&CONTROL」技術に、思考する能力「THINK」を取り込んだ先進のテクノロジーは、すでに暮らしや社会の様々なシーンで活躍しています。

たとえば「モノづくり」の現場では、AI技術による機械の故障予知や、ロボット技術で人の能力を引き出すサポートを。

「ヘルスケア」では、血圧計などの生体モニタリング技術で集めたバイタル情報や生活情報を活かし、個々の人に最適な医療支援・健康管理を。

「モビリティ」分野では運転集中度センシング技術などで、世界中の人々の安心・安全な移動の促進を。

そして「エネルギーマネジメント」の領域では、地球環境を守るために、創エネ・蓄エネ・省エネの連携で、エネルギー効率の最大化を。

未来を担う次世代のために、今までにない価値を創造する。

技術で世の中を変えていく、オムロンのチャレンジがはじまります。

Innovation for Generating Values

オムロン



SENSING
& CONTROL
+ THINK

OMRON



若手芸術家支援事業



京都商工会議所では、次代を担う美術若手作家を支援するため、作品の発表機会の創出、購入希望者とのマッチングの取組みを行っています。今回、ご紹介する作品はいずれも、本所が共催する「京都 日本画新展」に出展されたもので、2019年11月末まで、京都経済センター7階 京都商工会議所内 役員エリアにて常設展示を行っております。ぜひこの機会にご覧いただくとともに、ご購入をご検討ください。

(※ご覧をいただくには、事前に予約が必要です。)

本件に関するご照会は、
京都商工会議所 総務部管理課(075-341-9743)までお願い致します。



想

小杉 侑未

販売価格(税抜) 400,000円
(91.0x72.0cm)



Sound of Silver

田口 涼一

販売価格(税抜) 189,000円
(91.0x60.6cm)



Passage

落合 浩子

販売価格(税抜) 750,000円
(91.0x65.2cm)



ののみや

小鍵 康子

販売価格(税抜) 30,000円
(91.0x72.0cm)

京都商工会議所 会報誌 特別号

京 Vol.1
キョウビジネスレビュークロス
Business
Review Cross

- 02 **立石 義雄** 京都商工会議所 会頭
— 創刊のご挨拶
- 04 **為末 大** Deportare Partners 代表・元陸上選手
— 自分を育てる アスリートから実業家へ
- 08 **齋藤 峰明** シナリーインターナショナル 代表
元エルメス本社 副社長
— ものづくりを通して「心象」を育てる
- 10 **牧野 成将** 株式会社Darma Tech Labs
共同創業者・代表取締役
— 日本のモノづくりを世界に広げる

発行日 2019年9月20日
編集兼 発行人 兒島 宏尚
発行所 〒600-8565
京都市下京区四条通室町東入
京都経済センター7F
TEL 075-341-9751
WEB <https://www.kyo.or.jp/kyoto/>
印刷 土山印刷株式会社



京都商工会議所会頭

立石

Yoshio Tateisi

義雄

京都経済センターの完成から半年。“クロスバリュークリエーション”による京都経済の活性化に向けた取り組みが進む中、「京Business Review X」の創刊にあたり、立石会頭にお話を伺いました。

知恵産業がこれからの社会を 切り拓くカギとなる

現在の社会は、これまでの大量生産・大量消費の時代からパラダイムシフトの中にあります。個性やこだわりを重視するライフスタイルや人の心の豊かさを重視する社会へと進む中で、安心安全、環境、エネルギー、健康などの複雑化・多様化する社会課題を解決し、きめ細やかな変化対応力のある企業を育てて行くこと

が必要です。

こうした意欲的な企業が成長していく原動力となり得るのが、「知恵ビジネス」です。京都の地域特性や、各々の企業が独自に培ってきた強みである知恵を付加価値の源泉として、他にはないオリジナルの技術や商品、サービスを開発し、新たな顧客や市場を創造していくビジネスです。12年前に会頭に就任して以来、一貫して知恵ビジネスの創出に取り組んできたことで、京都府や京都市にも知恵ビジネス育成

の輪が広がり、オール京都による支援体制を築くことができました。こうした動きが、京都経済センターの実現に結びついた大きな力になったと考えています。

「クロスバリュークリエーション」 の発想による新たな価値の創造を

京都経済百年の計となる京都経済センターが3月にオープンし、約半年が経過しました。京都の中はもとより、京都以外からもさまざまな人や情報が経済センターに集まることで、新しい価値を生み出すビジネスの芽を育てていくために、京都商工会議所や一般社団法人京都知恵産業創造の森など、経済センターに入居する50を超える経済団体や産業支援機関が、日々取組を進めています。オープンイノベーションカフェ「KOIN」では、利用登録者が1,100名を超え、セミナーや交流会、発表会などのイベントが連日開催されており、賑わいを見せています。

2013年に策定した「京都ビジョン2040」では、京都のありたい姿を構成する3つの柱のひとつに「価値創造都市・京都」を掲げており、これを実現していくためには、独自の知恵を活かした高付加価値な商品・サービスを展開する企業を数多く生み出し続けることが重要です。そのためには、京都だけでなく、京都以外からも企業や人、情報が一堂に集積し、有機的につながることで、さらに新しいビジネスが生まれるような好連携を生み出す「場」が必要です。京都経済センターはまさにその場となる重要な

拠点です。産業だけでなく、芸術や文化など多様なジャンル同士を掛け合わせる「クロスバリュークリエーション」の発想のもとで、京都経済センターの重要な機能の一つである「交流と協働の促進」の実現に向け、京都企業が脈々と受け継いできた企業家精神や知恵、ノウハウを次世代へと継承・発展させるとともに、未来を担う若い活力を取り込むことで、新たな知恵ビジネスや社会課題を解決するベンチャーの創出、産業人材の育成に取り組んで参ります。

時代の先端を走るイノベーター から学んでほしい

本誌では、これまで隔月発行してきた会報誌とは趣向を変え、イノベーションや価値創造に取り組み、独自の知恵を活かして活躍されている「人」にクローズアップして、講演録やインタビュー記事をお届けいたします。本誌で紹介する方々は、これから知恵ビジネスを展開しようと考えている若い経営者や起業家のお手本となる方々です。

京都の未来を切り拓くキーワードとなる「クロスバリュークリエーション」からとって、「京Business Review X(クロス)」と名付けました。時代の先端を行くイノベーターたちの活動内容やそこに込められた思いを知ることで、読者の皆様に新しい気付きのきっかけとなることを願っています。自社の知恵を改めて見直し、皆様のビジネスのお役に立つような冊子としてご愛読いただければ幸いです。

自分を育てる

アスリートから実業家へ

京都経済4団体の共同事業として開催した「京都経済センター開業記念講演会」講師である為末さんの講演録をお届けします。

陸上スプリント種目で日本人初のメダルを獲得した競技生活や、アスリート引退後は実業家へ転身し、シェアオフィスの運営を行うなど、ダイナミックに挑戦を続ける為末さんのお話は、京都経済センターの重要な機能の1つである『京都産業の未来を担う起業家や産業人材の育成』に向けた大きなヒントにつながります。

大舞台での挫折

私は陸上競技を25年続け、日本では数少ないメダリストにもなりました。本日はそんな競技者としての経験と、引退後に実業家として自分なりにやっていることをお話しさせていただきたいと思います。

幼少期から足は速く、走ることが好きでした。加えてもうひとつ好きなことに読書がありました。特に大好きだったのがシャーロック・ホームズで、訪ねてくる人の服装やふるまいを見ながら心を読み職業を当てるシーンになんとも言えない感動を覚えました。思えばそういう原体験が今の仕事にもつながっています。

ご存知のように、陸上競技は個人競技であり、最後に頼れるのは自分一人という特徴があります。特に私はその傾向が強く、コーチをつけずにすべて自分で考え自分で決定するというのを貫いてきました。そんな中で、どうすれば自分の限界を突破できるかを考え実践してきた競技人生だったといえます。

振り返れば、中学生の時に短距離で全日本チャンピオンになりましたが高校で伸び悩み、陸上で生き残れるものを模索して18歳でハードルに転向しました。そして2000年のオリンピックに初めて400mハードルで出場することができました。ところが結果は予選敗退。オリンピックとい

う舞台を必要以上に意識してわけがわからなくなってしまい、気がついたらハードルに足をぶつけて転倒していたのです。覚えていたのは最初に跳んだ瞬間に違和感をおぼえたことだけでした。

失敗にも意味があり 必要なことだった

心理学では「トンネル効果」といわれる心の状態があります。人間は何か差し迫ったことがあると、まわりの情報を遮断してそれだけにフォーカスしてしまう現象で、集中するためにはよい効果でもあるのですが、逆にいえば視点を固定化してしまうことが問題にもなります。目の前の事実が動かさない以上、自分の認識を変えて対応しないと、うまく動くことができなくなってしまうのです。スポーツ選手が大きな試合で考えられないようなところで失敗する時は、こういう状態にあります。最初のオリンピックで転倒した私もまさにこの状態でした。

自分の心の中に敗因をつくって自滅してしまったことで、私はあらためて人間の心とは何なのかということに強い興味を持ちました。すべては心の中で起きている出来事なので、これを理解しない限りはまた同じことをやって負けてしまうのではないかと思ったのです。

為末大

Dai Tamesue

Deportare Partners 代表・元陸上選手



為末 大 (ためすえ だい)

1978年広島県生まれ。スプリント種目の世界大会で日本人として初のメダル獲得者。

男子400メートルハードルの日本記録保持者(2019年8月現在)。現在は、Sports×Technologyに関するプロジェクトを行う株式会社Deportare Partnersの代表を務める。新豊洲Brilliaランニングスタジアム館長。主な著作に『走る哲学』、『諦める力』など。

日本に戻ると、一体何が起きていたのか、それはどういうことだったのか、最終的にそれは今後どうすれば防げるのかを徹底して考えました。起きていた事実は当日風が強かったことと、海外の選手が日本の選手と異なるペース展開をしていたこと、その結果、風に押されて歩幅が狂い、後半に追い上げられて気持ちがあせったという2点が失敗の原因だったと分析しました。そこで走りながら状況に合わせて歩幅を調整する練習をするともに、それまでほとんど行くことのなかった海外遠征へのチャレンジを始めました。その経験によって世界といっても戦っているのは一人ひとりの人間だと実感することができ、海外へのコンプレックスが壊れたのが一番よかったです。この転戦のあとカナダで行われた世界陸上で、銅メダルを獲得することができました。

その後、もう一度メダルをとり、34歳で陸上競技を引退をしました。スランプや失敗もありましたが、そのたびになぜ失敗したか、どうしたらよかったかを考えることに加えて「ところで何を学んだんだろう」という質問を投げかけるようにしていました。それに答えられた瞬間に、失敗にも意味があり必要なことだったと



思えました。最後の4年間は本当に勝てなくて代表にも入れない中、自分と向き合いながら考え続けた日々で、大きな学びを得たように思います。しかし引退後のことを考えると、残りの人生でもう一度これほど情熱が持てることを見つけられるだろうかという思い、そしてこんな自分が持っている技術が、引退後、社会に通用するのだろうかという恐怖にとらわれずにはられませんでした。

「人間を理解する」 「人間の可能性を開く」

そんなこともあって、引退を決めた直後から手当たり次第にいろんな仕事をしました。うまくいかないことも多い中で悶々と考え続け、最終的に行き着いたのが、

競技の経験と、幼少期にシャーロック・ホームズを通じて人間観察に興味を持った原点でした。今、会社の理念として「人間を理解する」「人間の可能性を開く」ということを掲げていますが、思えば私は、これを陸上競技を通じて自分に対してやってきたんですね。それを社会に向けたということです。つまり何かにチャレンジして可能性を開きたいという人間は、起業しようとするだろうと思ひ至り、よい起業家はよいアスリートと共通点があるのではないかという持論のもとで、生涯にわたって伸び続ける人を見つけ、支援していく事業を始めたのです。

現在は会社の中に7、8社が入居するインキュベーション施設をつくり、日々、ともに話し合いながらそれぞれの活動を支援しています。たとえば当初から関わってきたのは、ロボット工学の

エンジニアから持ち込まれたスポーツ用義足の開発でした。その起業と同時に義足の選手のサポートを始め、現在では日本のトップ選手や全米のチャンピオンが使用してくれるまでになっています。目標としているのは最高・最速・最安の義足で、高性能を追求する一方、どんな選手でも求められるような低価格の義足の開発にもトライしています。また、足を失った子どもたちが訪れ、自分に合う義足を自由に選んで走れる「義足の図書館」などのNPO活動も行っています。

ほかにもさまざまな会社が入っていますが、私自身が理解できるものというポリシーのもと、何らかの形でサービスが直接人間にタッチしているものを基準としています。結果、8割以上がスポーツに関わる領域です。現在の日本の中では、こういうスポーツ領域に特化したインキュベーション施設やスタートアップを支援している会社はありません。中国・北京の清華大

学の中に同じような施設があるため、そこと連携をしてパフォーマンスアップを図っています。スポーツを通じて一般の人々の健康的な生活に貢献することも、課題のひとつです。最終的にはIPOやM&Aを目指していますが、まだ道は半ばです。しかしいくつかの会社では上場の準備に入りたいという話が出てくるくらいになりました。これからも日々試行錯誤しながら、ともに成長していければいいなと思っています。

何事も楽しんでやることが一番

最後に、私が競技者時代からの座右の銘で、今もオフィスに貼ってある孔子の言葉をご紹介します。「これを知る者はこれを好む者にしかず、これを好む者はこれを楽しむ者にしかず」。何事も楽しんでやることが一番だという意味ですが、実際は難しいことでもあります。私は競技人生

で、楽しいことをするというよりも自分のしていることを楽しむことを大事にしてきました。究極的に物事を楽しむということは、主体的に仮説を立てて取り組んでその結果を観察し、どうすればよりうまくいくかをさらに考えてもう一度取り組むという行為の繰り返しではないかと思うのです。こうした試行錯誤を繰り返す作業までを含めて楽しむことができれば、すべてうまくいくのではないのでしょうか。



「自社の知恵」を深掘りし、新たなチャレンジをバックアップ！ 「知恵の経営」や経営革新等を支援しています

「知恵の経営」報告書の作成支援などを通して、自社が持つ知恵（強み・経営資源）を認識・活用し、さらなる成長をお手伝いします。また、「自社の強みを活かして新しい取り組みにチャレンジしたい！」「事業の転換を図りたい！」など、経営革新や経営力の向上を目指す中小企業の意欲にお応えします。

「知恵の経営」・知恵ビジネス
についてはこちら



お問い合わせ

中小企業支援部 知恵産業推進課 TEL. 075-341-9781

日本独自の 伝統・文化への回帰

私がパリの三越とエルメスで仕事をしていた頃は、ちょうど日本が高度成長期からバブル期にかけて、誰もが幸せになろう、豊かになろうと、西洋のライフスタイルを積極的に取り入れていた時代でした。日本人は高いレベルの文化を培ってきただけに、今でも商店街の片隅にイギリスのサヴィル・ロウの技術を継ぐ仕立屋が店を構えていたり、イタリアのサルトーレの伝統技術が残っていたりと、良いものだけをきちんと目利きし、使い分け、長く使い続ける力を持っているのだと思います。

一方で、急速に西洋化が進んだことで、失われたものがあるのではないかと…。もしかすると、それは世界にとってかけがえのないものかもしれません。例えば、日本ではお茶の消費量はどんどん減少していますが、西洋の人たちは緑茶が健康に良いということで毎日飲んでいるうち、「これはおいしい」とライフスタイルの中に取り入れるようになりました。また、自然に対する感覚にしても、西洋では人間が自然を制御することで文明を発展させたという考えですが、日本の地方に行けば自然に対する一種の尊敬の念があって、最近のエコロジーの概念とは違う、自然と人間との共生の原風景が残っています。たくさんの外国人が日本を訪れるのは、ただ名所旧跡を見たいわけではなく、現代の世界の人たちが求めているものがそこにあるからではないでしょうか。

日本のようにその長い伝統と文化をこの現代まで大事に継承してきた国は世界

でもそう多くはありません。

西洋とは違った独特の自然観や美意識こそが日本の魅力であり、それが特に凝縮された場所が京都ではないかと思っています。

ものの背景にある 精神的価値が 生活の豊かさを 押し広げる

エルメスには何百年という歴史の中で脈々と磨かれてきた技術や感性があって、その時代の職人がそれらを引き継いでものづくりを行い、世の中に提供しています。エルメスのバッグは高価ですが、自分へのご褒美だと購入した女性が、子ども入学式や卒業式、結婚式などの大切な場面で使うことで、家族と過ごした大切な思い出がバッグにどんどん詰まっていく。そしてその思いを引き継いで、娘さんやお孫さんがずっとそのバッグを使い続けていく…。便利さや機能性など物質的な価値を超えた「ものの向こう側にある精神的な価値」をどれだけ認識して使ってもらえるのか、それが生活の豊かさにつながっていくのではないかと思います。

私たちがこういう生き方をしたいと思ったとき、そこには必ずものの存在があります。新しい家に引っ越して、もしも床の間や縁側がある部屋に似合う家具が見つからなければ職人に作ってもらうしかありませんが、実は京都でもこうした伝統技術がどんどん失われています。

A portrait of Mineaki Saito, a middle-aged man with glasses and a slight smile, wearing a dark blue blazer over a blue patterned shirt. He is sitting on a chair, gesturing with his hands as if in conversation. The background shows a modern office interior with large windows.

齋藤

Mineaki Saito

峰明

シーナリー・インターナショナル

代表／元エルメス本社
副社長

齋藤 峰明 (さいとう みねあき)

高校卒業後渡仏し、パリ第一(ソルボンヌ)大学芸術学部へ。卒業後フランス三越に入社、のちに株式会社三越パリ駐在所長に。

40歳でエルメスに入社、エルメス・ジャポン社長として、メゾンエルメスの設立などに尽力。2008年から2015年までフランス本社副社長を務める。

現在、シーナリー・インターナショナル代表。アトリエ・ブランマント(フランス・パリ)総合ディレクター、ライカカメラジャパン株式会社取締役、パリ商工会議所日仏経済交流委員会理事などを兼任。

フランス共和国 国家功労勲章シュヴァリエ叙勲。

最近、よく耳にする「サスティナビリティ」という言葉は自然環境と結びつけられることが多いのですが、それだけではなく、今まで私たちが享受してきた豊かな伝統を次の世代にも伝え、それを発展させることを指す言葉と捉えています。大量生産・大量消費の時代を一巡した今、改めて日本人が本来持っていたもの、例えば伝統的な産業やものづくりの技術等を見直し、それらを掘り起こすことで、私たちが幸せに暮らしていけるような新しい時代に合ったライフスタイルを確立すべきではないでしょうか。

日本文化の 本質を読み解き 人それぞれの 心の中にある 景観を育む

日本文化の中にある、現代の人たちが求めている本質的なものとは何でしょうか？ パリの市民は毎週のように朝市に出かけて好きな花を買い、自宅で生け花を楽しんでいます。ところが日本人の多くは、きちんと作法を習わなければ花なんて生けられない…と身構えてしまう。もちろん、形が本質を表すまで昇華しているものもありますが、海外から見ると少し窮屈に映るかもしれません。昔は生活の身近なところにあった多くのものが、今では伝統工芸というジャンルになってしまい、私たちが気軽に触れられなくなっていました。ですが、例えばお茶の世界では、何百年も前に千利休が侘び寂びを追究し、当時は革新的ともいえる精神性を展開して、現在まで脈々と続く伝統の礎を築き上げました。これからも本質を追求しつつ、伝統の上にもものを作り、今の上に未来のものを作り続けていく努力をしなければなりません。

当社の社名でもある「シーナ



リー」は、景観・景色という意味です。単に美しい景色ということではなく、「心象」という言葉があるように、人は数多くの経験を通して自分だけの風景を心の中にどんどん作っていきます。そしてそれに近い風景を見たとき、あるいは触れたとき、そこはかたなく懐かしさや美しさを感じるのです。急速に近代化した日常生活の中では、心に届くような風景に出会う機会は少なくなってきたかもしれませんが、例えば大正時代に和洋折衷の独自文化が芽生えたように、日本人が長い間育んできた伝統や文化、感性や美意識を現代に生かす提案をすることで、皆さんの心にたくさんのシーナリーを育むお手伝いができればと思っています。

京都のものづくりを全国・海外へ 京都商工会議所の販路開拓支援

京都の中小企業が知恵を活かして取り組む新たな商品開発や販路開拓をサポートしています。国内向けの販路開拓プロジェクト「あたらしきもの京都」では、各種マーケットに精通したアドバイザーやデザイナーと共に新しい商品を開発し、国内最大級の見本市への出展を通じて販路開拓を目指します。

また、国内外のマテリアル分野の販路開拓を目指す「KYOTO EFFECT」では、京都の伝統技術やものづくり技術を活かした素材の新規販路開拓・販路拡大をオール京都で支援しています。

あたらしきもの京都
<http://www.atarashiki-mono-kyoto.com/>



お問い合わせ

あたらしきもの京都 中小企業支援部 知恵産業推進課 TEL. 075-341-9781

KYOTO EFFECT 産業振興部 京都創生課 TEL. 075-341-9773



日本のモノづくりを
世界に広げる

牧野 成将

Narimasa Makino

株式会社 Darma Tech Labs 共同創業者／代表取締役

起業家転身のきっかけ

与えられた役割を意識し 化学反応を起こす 仕掛けづくり

京商との関わりは今から十数年前のこと。創業間もない学生起業家、若手起業家たちのビジネス・アイデアの芽生えと育成を促す京商「京都ビジネスモデル交流会」に、当時ベンチャーキャピタルで仕事をしていた私が、運営担当者としてお伺いしたのがきっかけです。

支援者としてそのとき感じたのは、京都の起業家たちは自社の技術やサービスをしっかり磨き上げているということ。そして京都に本社を置きながら、グローバルな視野を持って、京都以外の市場にも積極的にチャレンジしていく。彼らのモノづくりに傾ける思いやひたむきな情熱に触れるうち、私自身、京都のモノづくり、日本のモノづくりをサポートするような新たなビジネスに取り組みたいという気持ちが沸き上がってきました。

自分の強みって何だろう？ 私はエンジニアではないし、特別な技術を持っているわけではありません。しかし、私自身が起業家になるのではなく、これまでの経験を生かして、いろんな

人と人、あるいは人と場を結びつけ、そこから何か化学反応を生み出していけるような、そんな仕掛けを作っていくのが私の役割じゃないか…。ふと自分に与えられたミッションに気づくことで、今までの迷いが吹き飛び、京商などの協力を得ながら起業家としての一步を踏み出すことができました。

事業の内容

多様な階層の人たちをつないでモノづくりのポテンシャルを高める

2015年8月、京都試作ネットと連携して「Makers Boot Camp」を創業、主にスタートアップ企業の試作・量産化を支援するビジネスに取り組んでいます。2017年7月には、私自身のバックグラウンドでもある投資分野での活動として「MBC 試

作ファンド」というベンチャーファンドを立ち上げました。現在では、島津製作所やDMG森精機、マクセル、京都銀行、京都中央信用金庫、京都信用金庫など大手メーカー・金融機関等から出資していただき、国内9社、海外11社のスタートアップ企業に投資しています。

特に最近、起業家たちが気軽に交わる「京都ビジネスモデル交流会」のような取り組みが少なくなっている気がします。いろんなレイヤーの人たちを横串でつなぐような拠点を提供することで、京都のモノづくりのポテンシャルを高められないだろうか…。そう考え、今から2年前、京都市や京都リサーチパークと共に「KYOTO MAKERS GARAGE」を京都中央卸売市場近くにオープンしました。3Dプリンターやレーザーカッター、マシニングセ



ンタなど、簡単なオペレーションでモノづくりに挑戦できるデジタルファブリケーションを用意し、低額で試作などに取り組むことが可能です（学生は無料）。今、私たちが日常の中でモノづくりに触れるチャンスはあまりありませんが、起業家だけでなく、京都の未来を担う小学生や中学生、留学生たちにも来てもらって、モノづくりの楽しさを肌で感じる場にしてもらえたらと思っています。

京都の底力

熟成された糠床の モノづくり 組み合わせから生まれる 付加価値

私たちがミッションとして掲げているのは、"Make it in Japan"です。モノづくりというのは、単に何かを作るという意味ではありません。海外の人たちから見ると、着物で街を歩けば様々なサービスが受けられる「京都きものパスポート」や、5万冊以

上の漫画やグラフィックノベルを所蔵する「京都国際マンガミュージアム」など、京都で生まれた着物文化、漫画文化を何かの商品やサービスと結びつけた取り組みは、たいへんイノベーティブなモノづくりだと高い評価を得ています。

京都のまちには、昔から特別な“場”の力が備わっているのではないかと思います。会社の立ち上げを一緒に手伝っていただいた、当時、京都試作ネットの代表だった竹田正俊さん（㈱クロスエフェクト代表取締役）は「ぬかど糠床」という言葉を使ってそのことを表現されています。長い間かけて連綿と培われてきた伝統や文化、あるいは人や地域とのつながりなど、幾重にも層になったその糠床の中に新しい発想や技術を加えて熟成させると、 $A \times B = AB$ ではなく、 $ABCD$ だったり XYZ だったり予想もつかないものが次々と生まれてくる…。そんな糠床が京都のあちこちに

たくさんあって、例えばお酒の発酵技術が最先端のバイオテクノロジーに、清水焼の焼成技術がファインセラミックスの開発につながってきたのだと思います。中身を取り出すまでは糠床の中がどうなっているかは分かりませんが、いろいろなものを組み合わせさせて付加価値を生み出そうという取り組みこそ、京都が世界に誇るべきモノづくりの強みではないでしょうか。私たちが提供するサービスや場所も、そんな糠床の一つになればいいと思っています。

モノづくりというのは、地道な作業の繰り返しです。例えば、工場の整理・整頓などはモノづくりとは関係がないように見えますが、生産効率の向上や事故防止の観点から決して手を抜くことはできません。こうした取り組みや考え方を含め、世界中のスタートアップ企業に日本のモノづくりの魅力を発信できるようにな仕組みを作っていきたいですね。

準備から開業、その後の相談まで 京都商工会議所の創業支援

創業時に必要な事業計画の策定や融資の紹介、開業後の販路開拓、財務、従業員の人材育成など、夢を実現したい皆様の創業をサポートしています。創業したい方を応援する情報サイト「京都スタサポ」では、創業の基礎知識や役に立つセミナー情報をお届けしています。

京都スタサポ
<https://www.stasapo.kyoto/>



お問い合わせ

中小企業支援部 創業・事業承継推進課 TEL. 075-341-9782

より美しく

美しいということばのもつ、清らかでまじりけのない凜とした響き。

「美しい」だなんて、自分には縁がないと思っていまませんか。

でも美しさは、誰の中にもあるのです。

どこか知らない遠くの場所ではなく、

実はあなたの中にこそ存在しています。

時をこえて、美を追い求めてきたワコールは、

これからもよりいっそう真摯に、

あなたの中にある美しさに寄りそっていきます。

